



福島の現場をこの目で確かめる

新入職員対象に研修

この春に原子力機構に採用となった83名が4月11日に、福島県で実習を行った。この実習は新人研修の一環で、福島の現状を目で見て、原子力機構の福島での復興に向けた取り組みを知ることが目的だ。

新入職員を乗せたバスは茨城県東海村の原子力機構本部を出て、まず富岡町へ向かった。そこで新入職員たちは、災害の跡を目の当たりにする。震災により崩れた家屋、津波により流された車は、起こった当時のまま。新入職員たちは、津波による被災や福島第一原子力発電所事故の当時の様子についての説明に、真剣に耳を傾ける。車中でも、福島で勤務している職員が、事故後に行われた除染や福島県内の現在の復興に向けた取り組みについて説明を行う。

次に向かったのは、川内村のコミュニティーセンター。ここでは、原子力機構と川内村の復興に向けた取り組みについて講演が行われた。

川内村は福島第一原子力発電所事故後、いち早く「帰村宣言」を行い、住民の帰還に積極的に取り組んでいることで知られる。そこで震災後に、復興対策課の除染係長（当時）として、川内村の復興を支えてきたのが、同村の横田総務課係長（=写真右）だ。



同氏は「原発事故に伴う全村避難から帰村のための除染と線量管理」と題して講演。事故直後からの村民への対応と帰村への取り組みによって、現在、川内村への帰村者は増えつつあるが、「3年前、村を後にしてバスで避難所へ向かった時のことを思うと今でも涙が出る」と思いを語った。



また、原子力機構の油井センター長は新入職員に向けて「ひとりひとりが、福島のためにという気持ちを忘れず、業務に取り組む」よう訓示した。

その後、新入職員たちは川内村東部にある荻ダムへと移動した。原子力機構はここで、福島長期環境動態研究（F-TRACE）を行っており、新入職員たちは調査が行われている森や河川、ダムに案内され、それぞれの場所で調査内容の説明を受けた。また、採取した試料をその場で測定するために開発した移動式ラボも見学した。説明後には質疑応答も多数行われ、興味の程がうかがわれた。



さらにダム周辺では、福島研究開発部門が開発したガンマプロッタを用いて、線量測定を体

験した。ガンマプロッタを持って歩くことで、地表から 5cm と 1m の空間線量率を同時に測定することができる。また、GPS 機能を搭載しているため、測定データをリアルタイムで確認することも可能だ。新入職員たちは道路と森林内で線量率が変わっていく様子を興味深く眺めていた。

研修に参加した職員は、「被災地に赴くのは初めてで、情報としては知っていたが実際に3年たった今も復興がほとんど進んでいない状況を見ることによって驚いたと同時に津波という自然の力を恐ろしく感じた。また、川内村役場での役場の職員の方の生の声を聴いて2度と福島第一原子力発電所のような事故を起こしてはいけないということと、いち早く事態を収拾し地元の人たちが安心させるようにしなければならないという決意を改めて持った。これからの仕事をする際にこの決意をもって職務を遂行していきたいと思う。」と述べた。

TOPICS 福島 No. 48

独立行政法人日本原子力研究開発機構

福島研究開発部門 福島事業管理部

〒960-8031 福島県福島市栄町 6-6 NBF ユニックスビル 1階

TEL : 024-524-1060 FAX : 024-524-1073 HP : <http://fukushima.jaea.go.jp/>